学道一如

発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2025年6月25日
第16号

戦後80年
未来への伝言

双葉歴史探偵事務所
□7□

高島 旧日本陸軍特攻艇基地

終戦で証拠隠滅

（特攻艇と格納庫の洞窟のイメージ図）

現在の洞窟入口

小樽市中心部から北に約4キロ離れた茅柴岬。行き止まりの市道の先にある草やぶをかき分け5分ほど歩くと突如、洞窟が現れる。ここに旧日本陸軍特攻艇基地、特攻艇格納庫の洞窟が7本掘られていた。

入口は土砂で狭くなっている（上写真）が、中には幅5メートル、高さ2メートル、奥行き20メートルの空間が広がっている。そこに水上特攻艇マルレ（通称㋡、上写真、海軍では「震洋」水上特攻艇と呼ばれていた）が格納されていた。だが、終戦後、証拠は隠滅された。

特攻艇格納庫のあった茅柴岬の地図。

鳴谷節夫さん（元高校教諭）が元将校から聞いた話では、戦争末期、この周辺で爆雷を積んだ小型艇で敵艦に突っ込む特攻作戦の訓練が行われていたそうである。実際、その地へ行ってみると、特攻艇を出すため、地面は海に向かって下り傾斜になっているのがわかる。

歴史的経緯

高島に暁部隊の地下本部

小樽に第5船舶輸送司令部（暁部隊）が昭和18年に創設された。千島列島方面の兵站を担うためだが、空襲の危険性から高島町の山腹部に地下本部が建設されることになった。ここに第四野戦船舶廠六一九五部隊として特攻艇の基地が併設された。

朝鮮人徴用工による格納庫建設

建設は菅原組によって行われた。工事は朝鮮人徴用工によって行われたと言われるが、会社に資料は残っていない。工事は鶴嘴やスコップなどほとんど人力で行われていたため、極めて過酷なものであった。地域住民が朝鮮人労働者の過酷な状況を見かねて、監視の目を盗んで食べ物を差し入れた話が昭和50年頃まで地域に伝わっていた。

マルレとは

マルレ（通称㋡）は全長5・6m、幅1・8m、排水量1・45tで自動車用エンジンを搭載して20～25ノットで自走するモーターボートである。昭和19年に開発され、船体にはベニヤ板が使われたが、戦況悪化に伴い、材料が手に入らず、北海道では松板材で作る研究が進んでいた。そのため、船が重くなり、速度と運動性が低下する問題が発生

していた。

マルレは当初、船体後部に２５０キロ、あるいは１２０キロの爆雷を２個搭載し、敵艦に肉薄急反転して爆雷を投下する戦法が想定された。きわめて生還率の低い戦法ではあったが、海軍の特攻艇震洋が当初から自爆兵器として開発されたのとは異なる。だが、速度が遅く、船体が脆弱であるため、最終的には体当たりを基本戦術とする特攻兵器として使用された。

特別攻撃、マルレの訓練

高島での訓練は、昭和18年５月31日より開始され、通常攻撃と同時に「決一号作戦」の中核を占める特別攻撃を想定していた。第五方面司令軍樋口季一郎中将を迎えての供覧演習では、茅柴岬の基地整備隊が所管する七、八号舟艇洞窟から、トロッコ架台に載った艇が傾斜したレール上を走り洋上に進出、洋上で二群の編隊を保ち突撃線において展開、三方向から間欠的に突っ込みに入り、砂弾を投下したとされる。

戦争末期になって道東方面の防衛戦の強化とともに、特攻艇基地の建設も進められた。小樽で訓練を受けた兵士も、道内および千島列島の各基地に配備されていった。並行して小樽にもマルレが配備され、沿岸での対潜水艦活動にも従事していた。

戦後マルレは燃やされた

だが、最終的に小樽への連合軍の本格侵攻はなく、全ての艇は敗戦後の８月17日に焼却された。北海道各地に配備されたマルレも同様に扱われた。

特攻要員の苦悩

当時、小樽の訓練基地の責任者であった花輪文男元陸軍少尉は、その頃の心境を次のように回想している。

「今日か明日かと手ぐすね引いて待った甲斐もなく、艇身共に生き残る運命におかれるようになって、敗戦の苦悩を超越した自責の念が先に立ち、死境をさまよう自分をみつめていた」。

花輪氏のインタビューは戦後60年の『戦禍の記憶』（北海道新聞社）にも掲載されている。（左囲み）

編集を終えて

身近にあった海上特攻 １３００人以上の犠牲者 生き残った人々の苦悩

高島特攻艇については軍事機密であり、資料が残されていないため、小樽商大副学長の江頭進教授らが調査された記事（小樽チャンネルVol.10、２０１６年９月号）や北海道新聞（２０２０年８月）の記事を参考にまとめた。

当時は２０００隻の特攻艇、２０００人の特攻要員を養成する計画だったが、終戦により、小樽からの出撃は免れたという。私たちは、この歴史が現代に語り継がれるような工夫が必要だと感じた。洞窟は放置されたままで、安全上の問題もあると聞く。中に入って見学することは難しいだろうが、看板や石碑が設置されることを願う。

特攻要員に組み込まれた花輪さんの証言は貴重なものだ。

「生還は許されない」という出撃命令を待ち続けたが、終戦を迎え、マルレを焼却することになった花輪さん。海上特攻で犠牲になった仲間のことも去来しただろう。「戦争は絶対に繰り返してはいけない」という言葉の重みをかみしめたい。

特攻　太平洋戦争末期に日本軍が行った、航空機や魚雷などに人員を乗せたまま敵艦に体当たりさせる攻撃。陸海軍合わせて約６千人が亡くなったとされる。

【データ】特攻隊慰霊顕影会（1990年、ｐ131－312）より

・航空特攻	・海軍航空特攻隊員	2531人	
	・陸軍航空特攻隊員	1417人	計3948人
・海中特攻	・回天特攻隊員	106人	
	・特殊潜航艇	440人	計 546人
・海上特攻	・震洋特攻隊員	1081人	
	・海上挺進戦隊員（マルル）	263人	計1344人 総計5838人

※西日本新聞は総計6371人と推計、発表している。

証言　一人乗りの体当たり艇「生還許されぬ」

花輪文男さん（札幌市、1922年生まれ）

敗戦間際に、北海道でも陸軍の特別攻撃舟艇が極秘に試作された。

私は1944年8月、陸軍兵器学校を卒業。10月、小樽に本部がある第四野戦船舶廠に赴任した。45年3月に特攻要員に組み込まれた。

技術少尉の私ら２人が秘密命令を受け、広島県宇品の海上挺身隊（㋹戦隊）に出張した。モーターボートに爆薬を積んで敵艦船に体当たりする要領の研究だった。帰隊後、㋹艇を改良した一人乗り舟艇の整備計画を作った。

連合軍が冬場に上陸することを想定。波が荒く冷たい道内向けとして、波しぶきを防ぐ天蓋を付けた。㋹艇と海軍の「震洋」特攻艇で用いたベニヤ板の生産が追いつかず、松や杉の道産材を使った。

㋹艇は体当たりか、敵船の直前で爆雷を投下して逃げ帰るという２つの戦法があった。私も研究の結果、帰還も可能と分かった。しかし、ベニヤ板製より重く、速度が落ちるので狙われやすい。操縦手が撃たれて戦死してもかじを握っていれば目標に到達できる。「特攻とは生きて帰ることは許されない」と、司令官から厳命され、「体当たり特別攻撃艇」という名称を用い、粗製乱造でも一度の出撃に間に合えばよいものにした。

試験用舟艇は船外機付きの一型と、自動車エンジンをつけた二型の二種類。４月にそれぞれ50隻を留萌と函館の造船所に発注した。道内の船大工を動員し計2000隻を生産し、2000人の特攻要員と18000人の基地隊要員を養成する計画だった。完成した舟艇は敗戦直前に一、二型各３隻ほどが小樽に回航されてきた。訓練は手元の㋹６隻で７月に実施した。

敗戦後、舟艇は基地の洞窟があった小樽・カヤシマ岬の浜や沖合でガソリンをかけて焼いた。

＊　＊　＊

花輪さんは56年に防衛庁事務官となり、80年に退官した。「㋹艇で体当たりしていった人たちは気の毒。戦争は絶対に繰り返してはいけない」。書くことが好きで、当時の日誌の「修養録」を基に自伝をまとめた。

『戦禍の記憶　戦後六十年の百人の証言』より
（北海道新聞社編　道新選書39　2005年）

１５０名がコラボ新聞作成 ポスターセッション

高文連石狩・後志支部新聞第１回総会・研究会

６月20日、かでる２・７に石狩・後志支部の新聞部局員１５０名が集い、総会と研究会に参加した。

手作りの横断幕で盛り上げた宮崎ほのかさん（札幌開成３年、右）議長校としてリードした。

総会では各校の現状報告のあと、支部役員校と全道大会の役割を決め、予決算、事業計画を確認した。

午後はテーマごとにグループでコラボ新聞作成を話し合い、ポスターセッション形式で発表し、聞き合った。

「北海道の魅力」をテーマに新聞の内容を考えた落合優翔くん（右端）。

最後に全道専門委員の先生方から講評をいただいた。それぞれ新聞制作のヒントを持ち帰ることができた。